

新しい学生達と新たな気持ちで始まった。昨年は、クラスを持つことも教科として地域のNPOと共に学ぶ協働の関係作りも初めてであり、私自身が大きく学ぶ機会の一年でもあった。そして、そのふり返りからこの関係性と学習の必要性と成果を実感した。

二年目の今年度は全体把握のもと前期、中期、後期の目標を学生達と創りあう計画性をもつことができた。またクラス全体の学びの変化、コミュニケーションの変化が目に見えて分かったことは次の授業の励みにもなった。その変化するプロセスこそがサービスラーニングのふり返りとその蓄積される学生達の問題意識の深まり、視野の広がりとなった。さらにひとり一人の興味、関心、得意につながる声となってそれぞれがお互いに個性の発見にもなったと思う。特にグループミーティングは、個人の感性、考え、意見をありのまま出せるまでに時間を要したが、そのチーム作りのコミュニケーションは想いがつながるタイミング、時期も様々だった。当たり前のことであるがそれぞれ時間のかかり方が個人にもグループにもあった。この時間、“間”言葉にならない、コミュニケーションにつながらないこの時間に教員も忍耐の時間があった。多分学生達はその過ぎていく時間に自分への問いかけ他者との関係性の自分の言葉探しが始まっていたと思われる。それは次の授業の変化として見取ることができた。

授業そのものは教科として単位の評価がある。が、サービスラーニングの評価は、考えを深めていく通過点の評価でありその評価点を核に繋ぎ続けて進化熟成させていく人間の可能性の後押しでもある事を学生達にも伝えたい。そこから自分をどう積み上げ広げていくか、まさに自己形成力となって現実から解決力、決断力、洞察力へと個人の能力に磨きがかかると信じる。変化するスピードに流されることなく、足元の現場を直視する事がこれからの地域福祉に欠かせない。その視点に気がつき地域の課題の見方、考え方、解決する実践に学ぶ機会を得たことは大きな学習となったはずである。これは学生だけでなく受け入れたNPO、またそれにつながる多くの市民の学びあう時間だった。つながっている人、地域、そして半島の市民生活を見ただけでも地域課題の違いが見えたと思う。各クラス発表による発表の仕方も、まとめ方も色々あっていい、色々あるから違いに気がつき違いから学びも深まった。「共に生きる」は地域の多様な生活実態を知ることから始まる。違いを認め合い共に学びあい、生きることを肌で感じて人として地域に社会につながる学びが一人ひとり確実なものになっていることを願う。

新しい時代の新しい暮らし方、変化し複雑化していく社会の課題、仕組みも地域の多様なつながりから見えてくる。福祉そのものも時代にあった生活文化の創造であり、毎日の当たり前生きる暮らしの支援である。学生達がこのNPOの現場を通して“自分の問題”としてまた地域に生きる一市民の立場で複眼で未来を考え、さらに今から地域参画の主体であることに気づいたことは大変意義深いものと考えます。「未来のために今、地域で何が問題か？何が必要か？」の実践的発想をこの一年体を感じ取って学んだ。この学びをこれからの学習につなげてくれることを願う。